

集英社版

世界文学全集

51

トルストイ

トルスト
トルストイノII

訳
II

工藤精一郎

集英社

集英社版 世界文学全集 51

アンナ・カレーニナ II

一九七七年十二月二十日 印刷

一九七八年一月二十五日 発行

訳者 工藤精一郎

編集 株式会社 綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三六―五
電話 (〇三) 二三九―三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六―
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社



目次

アンナ・カレーニナ
Ⅱ

工藤精一郎訳

3

後記・注解

解説

工藤精一郎

年譜

433 425 423

アンナ・カレーニナ
II

第V部

1

シチエルバツキイ公爵夫人は、あと五週間しかない大斎期までに結婚式を挙げることは、それまでには娘の嫁入り支度の半分も間に合いそうもないので、とうてい不可能だと考えていた。とはいふものの彼女も、大斎期のあとではあまりにもおそすぎるといふレーヴィンの意見にも、同意しないわけにはいかなかった。というのは、シチエルバツキイ公爵家の伯母にあたる老婦人が、ひどく重い病いの床に臥せていて、もう長くはもつまいと案じられていたが、亡くなるようなことがあったら、喪中のために結婚式をさらに日延べしなければならなくなるからである。そこで、娘の財産として持たせるものを大口と小口の二つに分けることに決めて、公爵夫人は大斎期のまえに婚礼を行なうことに同意した。公爵夫人は小口の方は式までにすっかり整

え、大口の方はあとで送ることに決めたが、それでいいのか、わるいのか、さっぱりまじめに返事をしないので、レーヴィンにひどく腹を立てていた。この夫人の考えは、新婚夫婦は式のあとすぐに村へ発つし、そちらでは大口の方の道具は必要がないので、かえって好都合だった。

レーヴィンはいかかわらず狂気としか思われぬ精神状態にあった。つまり彼は、自分と自分の幸福とが世界の主要な唯一の目的であり、いまは何も考えたり、気を配ったりする必要はなく、すべてが自分のためにほかの人々によって行なわれているし、これからも行なわれるのだ、と思っていた。彼は将来の生活の計画や目的をさえいっさいもつていなかった。彼はすべてがうまくいくだろうと思ひこんでいたので、その決定をほかの人々にまかせていた。兄のコズヌイシェフや、オブロンスキイや、公爵夫人が、しなければならぬことを彼に教えてくれた。彼はすすめられることにただ同意さえしていればよかった。兄は金を借りてくれたし、公爵夫人は式のあとモスクワを発つことをすすめた。オブロンスキイは外国旅行をすすめた。彼は何を言われても反対しなかった。『それが楽しいなら、好きなようにしてください。ぼくは幸福だし、この幸福は、あなた方がどんなことをなさろうと、すこしも変わりはないから』と彼は考えていた。オブロンスキイから外国旅行をすすめられたことをキティにつたえたとき、キティがそれに

同意しないで、将来の生活について自分で決めたある要求をもっていることを知って、彼はすっかり驚いてしまった。レーヴィンが村に好きな仕事をもっていることを、彼女は知っていた。彼が見たところでは、彼女はその仕事を理解していなかったばかりか、理解しようという気もなかった。それは、しかし、彼女がその仕事をひどく大切なものだと思ふことの妨げにはならなかった。だから彼女は、自分たちが村の屋敷に暮らすことになることを知っていたし、自分が住むわけでもない外国へではなく、家庭をもつことになるはずの村へ行くことを望んだのだった。この明確に言いあらわされた意向がレーヴィンをびっくりさせた。しかしレーヴィンはどちらでもよかったので、早速オブロンスキイに、まるでそれが当然のことのように、すぐに村へ行き、豊かすぎるほどの趣味を生かして、知っているかぎりの準備をしておいてくれるように頼んだ。

「ところで、きみ」とある日オブロンスキイは、新婚夫婦を迎える準備をすっかり整えて、村からもどって来ると、レーヴィンに言った。「懺悔の式に出たという証明書はもってるかい？」

「いや、どうして？」

「それがないと式を挙げるのできんのだよ」

「あい、やい、やい」とレーヴィンは叫んだ。「ぼくはたしかここ九年ほど、齋戒なんかしてないはずだが、そんな

ことは考えもしなかったよ」

「あきれた男だよ！」と笑いながら、オブロンスキイは言った。「そのくせぼくをニヒリスト呼ばわりするんだからな！ それはとにかく、まずいよ。齋戒するんだな」

「いつ？ あと四日しか残ってないんだぜ」

オブロンスキイはそれも段取りをつけてくれた。そしてレーヴィンは齋戒をはじめた。レーヴィンのような、自分は信仰をもたないが、他人の信仰は尊重する人間にとつて、およそ教会の儀式というものに列席したり、参加したりすることは、ひどく辛いことだった。だからいまのように、何ごとにも感じ易い、涙もろい心境になっているときには、自分を偽って装わねばならぬことは、レーヴィンには、単に辛いだけでなく、まったく不可能なことに思われたのだった。いま、自分の栄光と開花の最中にありながら、あるいは心を偽るか、あるいは宗教を冒瀆するかせねばならぬとは、彼はそのどちらでもできそうもないことを感じた。しかし、齋戒せずに証明書だけをもらうわけにはいくまいかと、何度執拗に頼みこんでも、オブロンスキイは、それはできないと突っぱねた。

「だって、どれほどの苦勞なのだ、たかが二日じゃないか？ それに司祭は実にやさしい利口な爺さんだしき。なあに、きみが知らないうちに、上手にそのへそ曲がりの歯を引き抜いてくれるよ」

最初の礼拝式に臨んで、レーヴィンは十六歳から十七歳のころに経験した少年時代の強い宗教的感情の思い出を甦よみがえらせようとこころみた。だがすぐに、それが自分にとってまったく不可能であることを、彼はさとした。そこで

彼は、これらの儀式を、儀礼上の訪問のような、何の意味もない空疎な習慣として見ようとしてみたが、それがどうしてもできないことを感じた。レーヴィンは、宗教に対しては、同時代の者たちの大多数のように、きわめてあいまいな態度をとっていた。信じることはできなかったが、同時に彼は、それがみなまちがいだという強い確信をもっているわけでもなかった。だから彼は、自分がしていることの意味を信じることもできず、かといって、空疎な形式主義と決めて、冷静に見ていることもできぬままに、齋戒の儀式の間、自分でも理解できぬこと、したがって、何か偽りのよくないことだと内心の声が語りかけることを行ないながら、気まずさと恥ずかしさを感じていた。

勤行の間、彼は自分の見解と相反しないような意味をあたえようと努めながら、祈禱きとくを聞いたり、またそれが理解できず、当然批判すべきものだと感じながら、努めて聞くまいとして、自分の考えや、観察や、教会の中にぼんやり突っ立っていると異常なほど鮮明に頭の中に甦よみがえってくる諸々の回想などに、ふけったりしていた。

彼は朝の礼拝式と、祈禱式と、夕べの勤行を立ちづめで

勤め終わると、翌朝はいつもより早く起き、茶も飲まずに、朝の勤行と懺悔式に出るために、八時に教会に行った。教会には、乞食こじきの廃兵と、二人の老婆と、教会関係者のほかは、まだ誰もいなかった。

薄い法衣の下に長い背中の左右の筋肉がはつきりとわかる若い補祭が、レーヴィンを迎えると、すぐに壁際の教卓きょうたくの前に行き、戒律を読みはじめた。それを聞いているうちに、特に『パミールロス、パミールロス』と聞こえる、ゴイ「主よ、憐れみたまえ」という文句がひんぱんに、早口にくりかえされるに至って、レーヴィンは、自分の考えがとじこめられて、封印されてしまったような気がして、いまはそれを動かしたり、揺すったりすべきではない、そんなことをしたら混乱が生じるにちがいないと感じた。だから彼は、補祭のうしろに立ちながら、聞こうとも理解しようともせず、自分のことばかり考えていた。『彼女の手の表情は驚くほど豊かだな』と彼は昨日二人きりで隅すみのテーブルをはさんですわっていたときのことを思い出しながら、考えた。このごろでは、ほとんどいつもそうなのだが、二人には何も話すことがなかった、だから彼女は、テーブルの上に手をのせ、指を開いたり閉じたりして、その動きを眺めながら、自分でくすくす笑いだした。彼は、その手に接吻くちくちしたことや、それからばら色の掌てのひらの手相をしげしげと見たことを、思い出した。『またパミールロスか』とレーヴィ

ンは十字を切り、礼拝して、深く頭を垂れる補祭の背中のしなやかな動きを見ながら、思った。『彼女はそれからおれの手をとり、掌の線をしげしげと見て、いい手相をしてらっしゃるわ、と言ったつけ』そこで彼は自分の手と、補祭の短い手を見くらべた。『うん、今度はもうじき終わるぞ』と彼は思った。『いや、またはじめかららしいな』と祈りの文句に耳をすましながら、彼は考えた。『いや、もう終わる。そら深いお辞儀をした。あれはいつも終わるまえだ』

襷の折返しをついた袖口そでぐちの中の手で気づかれぬように三ルーブリ紙幣を受け取ると、補祭は、記帳いたしますからと言って、がらんとした教会の床の敷石に新しい靴くつの音を活発にひびかせながら、祭壇の奥へ入って行った。しばらくすると彼はそこから顔を出して、レーヴィンを招いた。それまで閉じこめられていた思考力が、レーヴィンの頭の中で動き出したが、彼は急いでそれを追い払った。『何とかなるだろうさ』と違って、彼は説教壇の方へ歩き出した。小さな階段をのぼって、右へ曲がると、司祭の姿が見えた。司祭は、まばらな半白の顎鬚あごひげを生やし、生気のない善良そうな目をした小柄な老人で、経机の前に立って、聖礼記のページをめくっていた。レーヴィンに軽く会釈すると、彼はすぐに慣れた声で祈りを唱えはじめた。唱え終わると、彼は深々と頭を垂れて礼拝し、やおらレーヴィンの方に向

き直った。

「ここに姿は見えぬが主キリストがお立ちになり、あなたの懺悔をお受けになられる」と彼はキリスト磔はりつけの十字架をさしながら、言った。「聖なる使徒教会がわれわれに教えることすべてを、あなたは信じますか？」と老司祭はレーヴィンの顔から目をそらし、肩帯の下に両手を組み合わせながら、つぶけた。

「わたしは疑っていましたが、わたしはすべてを疑っていません」とレーヴィンは自分でも不愉快な声で言う、口をつぐんだ。

老司祭は、レーヴィンがさらに何か言いはしないかと、しばらく待った、そして、目をとじると、Oにアクセントをつける早口のウラジミル訛なまりで言った。

「懷疑は人間が生まれながらにもつ弱さですが、われわれは慈悲深き主に心を強くしていただくように、祈らねばなりません。あなたはどのような罪をもっておりますか？」と老司祭は時間をむだにすまいと努めているかのように、すこしの間まもおかずにつけくわえた。

「わたしの最大の罪は懷疑です。わたしはすべてに疑いをもち、ほとんど疑惑からぬけ出せずにおります」

「懷疑は人間が生まれながらにもつ弱さです」と老司祭は同じ言葉をくりかえした。「主わがにどんなことに疑いをもちますか？」

「何もかも疑います。ときには神の存在にさえ疑いをもつことがあります」とレーヴィンは思わず言ってしまった、自分の言ったことの不作法さにはっとした。しかし老司祭にはレーヴィンの言葉が思ったほどの印象をあたえなかった。

「神の存在にどんな疑いがありますか？」と老司祭はそれとわからぬほどの微笑を浮かべながら、間をおかずに言った。

レーヴィンは黙っていた。

「神の天地創造を見ながら、創造者たる神にどんな疑いをもちうるのですか？」と老司祭は早口の慣れた口調でつづけた。「天空を太陽や月や星で飾ったのは、誰でしょう？大地を美しい装いで被ったのは、誰でしょう？神がいなければどうなるでしょう？」と問いかけるような視線をちらとレーヴィンに投げて、老司祭は言った。

レーヴィンは、老司祭と哲学的な議論をはじめるのは不作法なことにちがいない、と感じたので、質問に直接関係のあることだけを答えた。

「わかりません」とレーヴィンは言った。

「おわかりにならぬ？ それなら、神がすべてをお創りになられたことを、なぜあなたは疑うのです？」と老司祭は笑みをふくんだいぶかしげな顔で言った。

「わたしは何もわからないのです」とレーヴィンは自分の

言葉が愚かしいものであり、しかもこのような場合には愚かしいものにならざるをえないことを感じて、赤くなりながら言った。

「神に祈り、そして頼みなさい。聖者たちでさえ懷疑にとられ、自分の信仰が堅固なものになるように神に頼んだものです。悪魔は大きな力をもっています。われわれはそれに負けてはなりません。神に祈りなさい、神に頼みなさい。神に祈りなさい」と老司祭は急いでくりかえした。

老司祭は瞑想に沈んだように、しばらく黙っていた。

「あなたは、わたしの教区の信徒で神の子であるシチエルバツキイ公爵のご令嬢と、結婚なさるそうですか？」と老司祭は微笑みながらつけくわえた。「美しいお嬢さんですな！」

「ええ」と老司祭の言葉に赤くなりながら、レーヴィンは答えた。『何のために懺悔式でこんなことを訊く必要があるのだろうか？』と彼は思った。

すると、その彼の考えに答えるように、老司祭は言った。「結婚なされば、神は、たぶん、あなたに子宝をお恵みになるでしょう、そうじゃありませんかな？ そこでだ、あなたを無信仰にひきこもうとする悪魔の誘惑に打ち勝たなければ、あなたはお子さん方にどのような教育をあたえることができるでしょう？」と老司祭はやさしく叱るように言った。「もしわが子を愛するなら、あなたは、よい父親

として、お子さんに富や、贅沢や、名譽を望むだけではなく、お子さんが救われ、真理の光で魂が照らされることも望まれるでしょう。そうじゃありませんか？『お父さま、この世でよくを喜ばせてくれるいろんなもの——大地だの、水だの、太陽だの、花だの、草だのは、誰がお創りになったの？』と無邪気なお子さんに訊かれたら、あなたは何と答えますかな？ まさか『知らないな』とは答えられますまい？ 主なる神がその大きな慈愛からこれをあなたに啓示されたのに、あなたが知らぬわけがない。あるいはまた、『あの世では、何がよくを待ってるの？』と訊かれたとき、父親のあなたが何も知らなかったら、お子さんに何と答えます？ どうして答えられます？ お子さんを俗世や悪魔の誘惑に委ねるのですか？ それはよくないことです！』と老司祭は言った、そして言葉を切ると、首をかしげて、善良そうな柔和な目でレーヴィンを見まもった。

レーヴィンはいまは何も答えなかった。というのは、老司祭と議論したくなかったからではなく、誰にもこのような質問をされたことがなかったし、子供たちからこのようなことを訊かれるまでには、まだまだ答えを考える時間があると思ったからだ。

「あなたは人生の一つの時期にさしかかっている」と老司祭は言葉をつづけた。「道を選び、それを守らねばならぬ時期にな。神がその慈悲によりあなたを救い、憐れんで

くださるように、祈りなさい」と彼は結んだ。「われらの主、われらの神なるイエス・キリストは、慈悲と、惜しみなき愛もて、神の子たる汝を許すなり……」そして、許しの祈りを唱え終わると、老司祭はレーヴィンに祝福をあたえて、放免した。

その日家にもどると、気まずい状態が終わったし、しかも自分を欺かずにすんだという、喜ばしい感情を味わった。そのうえ彼には、あの善良なやさしい老司祭が言ったことは、決してはじめに考えていたような愚かなことではなかったし、そこには解明しなければならぬような何ものかがあるという漠然とした記憶が残った。

『もちろん、いまは暇がないが』とレーヴィンは考えた。『いずれあつて』レーヴィンはいまは、これまでにないほどに、自分の心の中に何かあいまいで不純なものがあることと、宗教に対して、これまで他人にはつきりと見てとって、反感をおぼえ、そのために友人のスヴィヤジスキを非難していた、その同じ態度を自分もとっていることを、はつきりと感じた。

その晩ドリイのところで、キティとともに過ごしながら、レーヴィンは楽しくてたまらなかった、そして躍りだしたような気持をオブロンスキイに説明しながら、いまの自分、輪を走りぬけることを教えられていた犬が、やっとそれをのみこんで、命じられたことをみごとにやってのけ、

嬉しさにきゅんきゅん吠えて、しつぽを振りながら、テールや出窓にとび上がってはしゃいでいるようなものだ、と語った。

2

結婚式の当日、慣習にしたがって（公爵夫人とドリイがすべての慣習を守ることをきびしく主張していたので）、レーヴィンは花嫁に会わずに、ホテルの客間でたまたま訪ねて来た三人の独身者とともに食事をした。つまり兄のコズヌイシェフと、大学時代の友人で、いまは自然科学の教授になっているカタワソフ（これはレーヴィンが街で出会って、連れて来たのである）と、レーヴィンの熊狩り仲間、婚礼の付添人をしてくれるモスクワの治安判事チリコフの三人だった。食事はひどく楽しかった。コズヌイシェフはすごく上機嫌で、カタワソフの奇抜な意見をおもしろがっていた。カタワソフは、自分の奇抜な意見が理解され、その価値を認められているのを感じながら、得意になってそれをひけらかしていた。チリコフは人がよきそうにここにこしながら、どんな話でも聞き役にまわっていた。

「いや、まったく」とカタワソフは教壇で身についた癖で、言葉を引っ張りながら、言った。「われらの友人コンスタンチン・レーヴィンは実に有能な青年でしたよ。わたしは

言ってるのはこの席にいない男のことですよ、だって彼はもういませんでな。当時彼は学問を愛しましたし、大学を出てからも、人間らしい興味をもっておりましたな。ところがいまは、その才能の半分は自己を欺くことに向けられ、あとの半分は——その欺瞞を正当化することに向けられてるってわけですよ」

「あなたのような徹底した結婚の敵には、まだお目にかかったことがありません」とコズヌイシェフは言った。

「いや、わたしは敵じゃありませんよ。わたしは分業の味方ではない。何の能もない連中は、せめて子供でもこしらえるべきだし、あとの連中は——その子供たちの教育と幸福に協力すべきだ。これがわたしの考えですよ。この二つの仕事を混同したがる連中は、ごまんといますが、わたしはそういうのとはわけがちがいますよ」

「きみが恋をしたとわかったら、ぼくはとび上がって喜ぶぜ！」とレーヴィンは言った。「忘れずに、ぼくを結婚式に呼んでくれよ」

「恋はもうしてるよ」

「ああ、鳥賊にかい。実はね、兄さん」とレーヴィンは兄に言った。「こいつはいま栄養に関する本を書いてるんだよ、そして……」

「おい、まぜっかえすなよ！ 何の本だろうと、どうでもいいくせに。問題は、ぼくはたしかに鳥賊を愛してるとい

うことさ」

「でもそれは、きみが妻を愛する妨げにはならんだろう」

「鳥賊の方はじゃましないでらうがな、妻の方がじゃまするさ」

「どうしてだい？」

「まあ、いまにわかるさ。きみは農業経営や狩猟が好きだな——まあ、どんなことになるかな！」

「そう、今日アルヒープが来て、言ってたけど、プルードノエには大鹿がわんさと集まってるし、熊も二頭見たそうだよ」とチリコフは言った。

「まあ、ぼくにかまわずせいぜい獲_とってくれよ」

「たしかにそのとおりだ」とコズヌイシェフは言った。「まあこれからは熊狩りとはおさらばだな——妻君が出してくれまい！」

レーヴィンは微笑した。妻が出してくれない情景を想像すると、すっかり楽しくなつて、彼は熊を見る喜びなど永久に拒否してもよいと思つた。

「でも、やはり残念だな、きみをぬきにしてこの二頭の熊をしとめるなんて。ところで、ハビロワで最後にやったあの狩りをおぼえてるかい？　今度のも素晴らしい狩りになるだろうな」とチリコフは言った。

レーヴィンは、狩りをしなくてもどこかに何か素晴らしきことがあるはずだと言つて、彼をがっかりさせたくなか

つたので、何も言わずに黙っていた。

「独身生活と別れるこの慣習ができたのも、理由があることかもしれない」とコズヌイシェフは言った。「どんなに幸福であろうと、やはり自由が惜しまれるさ」

「さあ、白状しまえ、ゴーゴリの花婿（『結婚の喜劇』の主人公）みたいに、窓から逃げ出したい気持があるんだらう？」

「きつとあるさ、でも白状するものか！」とカタワソフは言つて、大声で笑いだした。

「何だ、窓が開いてるのか……じゃ、いますぐトヴェーリへ逃げ出そうじゃないか！　牝熊が一頭いるんだ、穴がわかつてるんだよ。ほんとに、出かけようや、五時ので！　あつちは勝手に騒がせるさ」と笑いながら、チリコフは言つた。

「でも、正直のところ」とレーヴィンはやにやしなうながら言つた。「自由を惜しむ気持を自分の心の中に見つけることができんのだよ」

「そりゃきみの心の中は目下混沌状態_{こんとんたい}でだな、何も見つけられないだろうさ」とカタワソフは言つた。「いまに、いくらか形がついてきたら、見つけられるさ」

「いや、ぼくは、自分の感情（レーヴィンは彼のまえで愛という言葉を使いたくなかつた）と……幸福のほかに、やつぱり自由を失うことを惜しむ気持を、すこしでも感じたいと思うんだ……ところが反対で、この自由を失うという

ことまでが、ぼくは嬉しいんだよ」

「話にならんな！ こりゃ望みなしだよ！」とカタワソフは言った。「彼の回復を期待して乾杯しましょう、それともせめて彼の夢の百分の一でも実現することを祈ってやりませんか。そうすればかつてこの世になかったような幸福が、彼を訪れるということになるでしょうからな」

食事が終わると客たちは、結婚式に出るための着替えに間に合うように、早々に帰って行った。

一人きりになると、独身者たちの話を思い出しながら、レーヴィンはもう一度自分に訊ねてみた。彼らが話していた自由を惜しむ気持ちが自分の心の中にあるだろうか？ 彼はこの問いかけに、くすつと笑った。『自由？ 何のために自由が？ 幸福は、彼女を愛し、彼女の望むことを望み、彼女の考えることを考えることにのみあるのだ、つまりおれの自由などはまったくくないこと——これこそが幸福なのだ！』

『だがおれには、彼女の考えや、彼女の望みや、彼女の感情がわかつているのだろうか？』と不意に何者かの声が彼にささやいた。すると不意に、奇妙な感情が彼を襲った。恐怖と疑惑が彼の心にひろがって、彼は何も信じられなくなった。

『彼女がおれを愛していないとしたらどうだろう？ おれと結婚するのは、単に嫁になるためだけだとしたら？ 彼

女は自分のしていることが、自分でもわかっていないのだとしたら？』と彼は自分に訊ねた。『彼女はいずれわれにかえるはずだし、そうしたら結婚してしまってから、おれを愛していないことと、愛することができなかったことを、さどるかもしれないのだ』すると彼女についてのきわめてよくない、妙な考えが、彼の頭に浮かんできた。彼は、一年前と同じように、ウロンスキイと彼女に嫉妬を感じ、二人がいつしよにいるところを見たあの夜が、まるで昨日のような気がした。すると彼は、彼女が打ち明けずにかくしていることがあるのではないか、という疑いが湧いてきた。彼は急いで立ち上がった。『だめだ、このままにはしておけない！』と彼は絶望的な気持で自分に言い聞かせた。『彼女のところに行つて、訊いてみよう。まだ自由だから、思いとどまるならいまのうちだと、最後の念をおすのだ。一生の不幸や、恥や、不信よりは、ずっとましだ!!』心を絶望でふさがれ、自分にも、彼女にも、すべての人々に悪念を抱きながら、彼はホテルを出ると、彼女の家へ馬車を走らせた。

彼女は奥の部屋にいた。長持に腰かけて、椅子の背や床にひろげられた、色とりどりの衣裳いしやうの山を整理しながら、小間使に何やら指図しているとところだった。

「あら！」と彼を見ると、嬉しさにきつと顔を輝かせて、彼女は歓声を上げた。「まあどうなさったの？ どうなさ

いましたの？（この最後の日までキティは彼にうちとけた口をきいたり、あらたまった言葉づかいをしたりしていた）ほんとに思いがけなかったわ！ わたし娘時代の服を選び分けてるところですよ、誰にどれをやるうかと思つて……」

「ほう、それはたいへんいいことですね！」と暗い目で小間使を見ながら、彼は言つた。

「退つておいで、ドウニャーシャ、あとで呼ぶから」とキティは言つた。「どうなさつたの？」と彼女は小間使が出てゆくと、思ひきつてうちとけた言葉づかいになりながら訊ねた。彼の興奮した、暗い、異様な顔に気がつく、と、たんにキティは恐怖に襲われた。

「キティ！ ぼくは苦しんでるんです。でも、一人で苦しんでもしかたがない」と彼はキティのまえに立ち、哀願するように彼女の目を見つめながら、絶望にうちのめされた声で言つた。彼はもう彼女の愛情にみちたいたつわりのない顔から、自分がたしかめようと思つたことが単なる杞憂にすぎなかったことを見てとつたが、それでもやはり彼女自身の口からその疑いを解いてもらいたかつた。「ぼくが来たのは、まだ時間があると言ひたかつたからです。まだすっかりご破算にして、誤りを正すことができます」

「何のことですか？ わたしにはさっぱりわかりませんけど。どうなさつたの？」

「ぼくがもう千度も言つたことです、どうしても考えずにいられないのです……ぼくがあなたに値しないということです。あなたがぼくとの結婚に同意するなんて、できるわけがなかつたのです。考えてごらんなきい。あなたはまちがっていたのです。よく考えてみてください。ぼくを愛するなんて、あなたにはできるわけがないのです……もし……はつきり言つてもらう方がいいのです」とじつと彼女を見つめながら、彼は言つた。「でないと、ぼくは不幸になるでしょう。みんなが何と言おうとかまいません。不幸になるよりはましです……いまならまだ大丈夫です、時間があるうちに……」

「何のことかわかりませんわ」と彼女はおびえて答えた。「つまりあなたはことわりたいたいとおっしゃるのね……やめた方がいいと？」

「そうです、もしあなたがぼくを愛していないなら」

「あなたは頭がどうかしたのね！」と彼女は怒りで真っ赤になつて、大きな声を出した。

しかしレーヴィンの顔があまりに哀れだったので、彼女は怒りを抑えた、そして肘掛椅子から衣裳を払いおとすと、彼の近くにすわり直した。

「あなたは何を考えてますの？ すっかりおっしゃってください」

「あなたがぼくを愛することができるようになって、そんなこと